

第3章

地球市民学 多文化コミュニケーション学

第1節 地球市民学 前期

中野和之・鈴木克彦
今村敦司・野田真里*
高井次郎**

【抄録】 思想・宗教文化、日本文化情報リテラシー、教育文化コミュニケーションの3グループに分かれ、文化比較についての学習を進め、異文化との共生に必要なものや諸問題を考える。3グループの合同授業では、外国人留学生を招いて交流会を持ち、各文化の共通性と異質性を体験的に理解し、多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づかせ、異なる文化に対する感性と寛容性を高める。そして科学的分析力・思考力や地球市民としての倫理観を身につける。

【キーワード】 学び合い 留学生 交流会 コミュニケーション 異文化理解 生活文化 学校文化 宗教文化
異質性 同質性 地球市民

1. 目標

- (1) 世界の多様な文化（自国の文化を含め）や文化の背景にあるものの見方・考え方について理解する。
- (2) 疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に必要な感性と寛容な心を高める。
- (3) 異文化間におこる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成する。

カリキュラムの編成方針として、思想・宗教研究、日本文化情報リテラシー、国際学校教育研究という軸を設定し、それぞれ各分野の視点から、共通性と異質性を理解、体験し、異なる文化に対する感性と寛容性を高めることを目標にした。

2. 学習方法

高校2年生を対象に1クラス40名を3つのグループ

（思想・宗教研究・日本文化情報リテラシー・英語メディア）に分け、それぞれのグループを3人の教師（社会・国語・英語）が担当して少人数授業を展開した。但し、3つのグループがそれぞれ単独で授業をするだけでなく、3グループ合同の授業を4回行い、学び合いの場面をつくり、他グループとの知識の共有を進めた。

今年度は、次の2点を重点目標とした。

- (1) 各3つのグループの単独授業を増やし、科学的探究力（解釈・分析・推論・批評）や論理的・多元的・批判的思考力を高めたり、地球市民としての価値・態度を身につけさせたりする授業内容を工夫する。
- (2) 体験的な活動を取り入れ、文化理解を深めたり、多文化コミュニケーションの意義や必要性にせまるようにする。

3. 年度計画

回	予定日	日本文化情報リテラシーグループ	思想・宗教研究グループ	国際学校教育研究グループ
1	4月13日（金） 全体説明希望調査 3グループ合同	オリエンテーション 今村グループの説明5分	オリエンテーション 中野グループの説明5分	オリエンテーション 鈴木グループの説明5分
2	4月20日（金）	日本人らしさの検討1 ・国際的規模で行われたアンケート結果から「日本人らしさ」を読み解く。	ものの見方、考え方 ① ギリシア人の思想	フィンランドの学校教育1 ・鈴木克彦先生フィンランド学校訪問スライドショー

*中部大学准教授 **名古屋大学教授

3	4月27日(金)	日本人らしさの検討2 ・国際的規模で行われたアンケート結果から「日本人らしさ」を読み解く。	ものの見方、考え方 ② ユダヤ教、キリスト教、 イスラム教	フィンランドの学校教育2 ・鈴木克彦先生フィンランド 学校教育持論展開と ディスカッション
4	5月11日(金)	特別授業1 多文化コミュニケーション合同ワークショップ(3グループ合同) *多文化社会をサバイブする(野田先生) コミュニケーション合同ワークショップ *言語・非言語によるコミュニケーションを経験する 体験的異文化教室(図書室)		
5	5月25日(金)	名大附らしさ1 ・名大附属らしさとは何か を資料を使って考える。	ものの見方、考え方 ③ 仏教の思想	留学生の話1 ラムさん(インドネシア) 小中高の教育体験
6	6月1日(金)	名大附らしさ2 ・名大附属らしさとは何か を討論等から考える。	ものの見方、考え方 ④ 近代哲学の考え方	留学生の話2 ヤンさん(中国) 小中高の教育体験
7	6月8日(金)	特別授業2 「文化とコミュニケーション」(高井先生) (3グループ合同)(図書室)		
8	6月15日(金)	情報とクリティカルシンキング1 ・情報の中に潜む「当たり前」 を知ろう。	ものの見方、考え方 ⑤ コンピューターの考え方	興味のある国の文化、学校 教育の個別調査1
9	6月22日(金)	情報とクリティカルシンキング2 ・情報をどのように受け取る べきか考えてみよう。	宗教を体感する 簡易的な坐禅入門	興味のある国の文化、学校 教育の個別調査2
10	7月6日(金)	特別授業3 世界の宗教文化入門(3グループ合同)(野田先生)(図書室)		
11	7月13日(金)	まとめ +夏休み探求課題の説明	まとめ +夏休み探求課題の説明	まとめ +夏休み探求課題の説明 (パソコン教室)
12	8月31日(金)	夏休み探究課題「受け入れ る溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れ る溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れ る溶け込む」の発表
13	9月7日(金)	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備
14	9月21日(金)	振り返りと総括・事後アンケート(図書室)		
15	9月28日(金)	特別授業4 多文化コミュニケーション合同ワークショップ(3グループ合同) 留学生 との合同交流会・発表会or討論(高井先生)(図書室)		

4. 実践内容

(1) 思想・宗教文化

中野 和之

- 1) テーマ:「哲学、宗教を通して見た世界」
- 2) ねらい: 現在、グローバル化されている世界の中で、それぞれの民族や人種間で起きる文化摩擦が問題となっている。もともと言語の構造が違う人々が同じ考え方に立って生きてはいない。また、同じ日本人同士でも意志の疎通は難しく、人間関係に根ざしたストレスを抱えている人々が多く存在している。
こうした状況の中、異文化を理解しようとしても無理がでる。それよりも異文化との違いをはっきりと認識する方が取り組み易い。「哲学、宗教を通して見た世界」では、世界の源流思想と言わ

れる古代ギリシア世界からキリスト教、イスラム教、仏教を中心にして、それぞれの考え方の違いを学習した。基本的には高校「倫理」の学習を取り入れながら進めた。附属学校だから出来るというような授業にはしたくないという思いから、授業に即しながらの発展的な内容を扱った。

- 3) 授業方法: 机をコの字型に配置し、教師からの発問に答えていくという形式で授業を進めた。それぞれテーマを設定し、その概要を短く説明し、その考え方や理解の仕方の特徴を自分に照らし合わせて考えるようにした。全ての生徒に発言を求め、お互いに考えている内容や考え方の違いに気づくよう発問を重ねていった。

- 4) 成果と課題: アンケート項目の中から担当グループに関係のある項目を抽出した。

①「答えの出にくい問題」について学習するこ

とは大切である。

- ②学習した問題に対して自分の意見や、考えを持っている。
- ③今まで持っていた知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つ機会となった。
- ④一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科を意欲的に取り組むことにつながると思う。
- ⑤自分は、他の人の意見を聞いて、論点を整理することができる。

上の5つの設問に対して、5：とてもそう思う 4：そう思う 3：どちらでもない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない、の五段階の選択形式で行った。

全体	グループ	全体	グループ	全体	グループ
1) 4.3	4.0	2) 3.9	3.7	3) 3.8	3.5
4) 3.2	3.4	5) 3.3	3.1		

アンケート数値から見ると、ほとんどの項目で、高2生全体の結果値が高かった。唯一、全体値より高かった項目4)は、高校の学習内容を取り入れながらの形式だったため、数値が高かったものと思われる。ただ、全体的に数値が0.2～0.3の範囲内であり、3.0以上の評価であるので、特段、悪化しているものとは考えられない。グループとは関連が少ない項目では、「週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しい」が2.9と0.3高く、「自分は、他の人に自分の意見を正確に伝えることができる」が2.7と0.5低かった。時間数が足りないと感じるのは、恐らく自分の考えを述べる学習であったため、「まとまった時間が必要である」と答えたと考えられる。また、自分の意見を正確に伝えることが低いのは、学習していく中で相手に対して意見を述べる難しさに気づいたのではなからうか。

以下、生徒の感想から補足していきたい。

「思想・宗教研究グループでは、毎時間特定の宗教等を取り上げ、討論形式で学習を進めてきました。生徒の中には父が僧である人、キリスト教学校出身の人など、個性を持つ人が多く、自分一人では知り得ない事を多角的に学習することが出来ました。複数回の授業を受けて感じたことは、特定の宗教を持たない日本という国がいかに異質であるかということです。我が国では限りなく自由に思想にふけることができます。しかし、その利点を考えようとしても思いつきません。結局、私たちは常識という枠組の中に縛られているのではないのでしょうか」(男子)

上記の生徒は、日本の信仰形態の多様性を異質として捉えながら、その異質の利点を常識に縛られない姿勢から導き出すべきだと述べている。考える授業の中で発想力が発揮されている事例であろう。

「このテーマを選んで、それぞれの人や宗教の思想はすごく難しかったけれど、自分とは違う考えを知れたり、新しい考えを知ることができて、とても面白かったなと思います。全く違う意見や、似た意見、私の考えを上手に代弁してくれたような意見など、様々で、納得できたり、又、今の社会につなげて話す子もいたりなど、本当に自分にプラスになったと思っています。」(女子)

この生徒は、対話することのおもしろさを述べている。自分の意見をうまく表現できない時に、それを共通の言葉として置き換えてくれる協力関係、対話内容を現実社会へつなげようとする方向性など、グループで考える授業の特徴を良く伝えていると思われる。対話とは討論とは違い、一つの真理を求めて話し合う行為を指す言葉である。だから、協力関係も形作られてくるのであろう。

以上の分析から、今後の課題として挙げられるのは、もう少しまとまった時間が必要なことであろうか。50分授業ではなく90分授業であれば、話し合いの中味を更に深めていくことができる。また、対話がうまく出来ない生徒への発言の促しも工夫が必要である。

(2)日本文化情報リテラシー

今村 敦司

- 1) テーマ 「データや外国人から見る日本人らしさの検討」
- 2) ねらい
この授業全体のねらいは、以下の通りである。
 - ① 世界の多様な文化(自国の文化を含め)や文化の背景にあるものの見方・考え方について理解する。
 - ② 疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に必要な感性と寛容な心を高める。
 - ③ 異文化間におこる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成する。
- 3) 授業方法

本校ではSSHプログラムの全体評価の一環として、毎年12月にTIMSSの理科調査のアンケートと同じ項目を本校の生徒に対しても行っている。このアンケート調査は当然自分たちも対象になっており、世界平均、日本平均、本校全体の平均と生徒が在籍する学年の平均を比べられるようになっていく。そこで、世界平均と日本平均のアンケート項目

の内容を分析、検討させ、日本の特徴とその数値になる理由を考察させることで「日本人らしさ」とは何かを考えさせた。

出した課題は、「『日本は世界と比べて～だ』という観点でデータ分析をしてみよう。」「『名大附属の生徒は世界(日本)と比べて～だという観点でデータ分析をしてみよう』というものである。

すべての授業において、出した課題をまず自分で考えさせ、その後3～4人の班で討論させて発表させ全体討論を経て各個人の意見を再構成させるという協同的探究学習法の手法を用いて授業を行った。

本授業は何回かゲストを招いて3グループ共同で行う授業がある。その中に、留学生を招き、日本に来て変だと感じた事象を話してもらい、生徒がその理由を解説するという時間がある。生徒はその場でその理由を考えるのだが、このグループではさらに詳しくその理由を考えさせ、レポートを書かせて発表するという形をとった。

4) 成果と課題

アンケート各項目の平均値を高校2年生年体の平均値と比較した。その結果の分析を以下に示す。各質問項目は次の中から選ぶようになっている。

5：とてもそう思う 4：そう思う 3：どちらでもない 2：そう思わない 1：まったくそう思わない

アンケート項目で本グループが平均値で4を大きく上回る数値を示したのは、1) S L P IIでは、様々な視点からの知識が得られると思う。4.4 4) S L P IIで扱ったような「答の出にくい問題」について学習することは大切である。4.5 31) 自分の意見を他の人に伝えることは大切だと思う。4.4 35) 他の人の考えを聞くことは、自分の理解を深めることの助けになると思う。4.3 38) 大きな問題を考えるときには、他の人と協力して考える方がよいと思う。4.4 の5項目である。これは、出された課題が答えの出にくく、様々な観点から検討しなければならない者であったことと、協同的探究学習法の手法を用いた授業であったことが効いていると考えられる。自分の考えを述べ、様々な意見を聞くことにより、つかみにくい課題の全容が明らかになっていくことを体験的に感じた結果が表れている。

アンケート結果の数値は概して狙い通りのものであり、全体と比べても数値が高い傾向にあるが、その差も0.1～0.3程度であり、誤差の範囲でありほぼ同じと見てよい結果となっている。

どちらでもないよりわずかに低い数値のなっていた項目は、15) S L P IIで学習したことに関連する既存の教科学習の内容についても深く学ぶきっかけになった。2.9 19) S L P IIで1つのテーマを詳

しく学んだことが、既存の関連する教科(例：社会、理科、数学等)を意欲的に取り組むことにつながると思う。2.9 20) S L P IIで学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。2.0 21) S L P IIは週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。2.7 22) S L P IIを週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。2.4 27) 自分は、疑似科学にだまされないだけの判断力を持っていると思う。2.9の6項目である。

15と19の間より、既存の教科との結びつきを意識することがあまりできていなかったようである。データ分析は処理の側面からは統計(数学)分析の手法という面では情報や国語、内容面では社会が関わり合っていると考えられるが、そのような教科が関わっていると感じられる課題の出し方や授業展開は、今後考えていかなければならない。

20は逆転項目なので、逆に良い結果となっている。21、22の項目は授業時間の間で長さ的には両者から今のままでも良いととらえることができよう。27の間は疑似科学の問題で、この授業では扱いきれていないのでこのような結果になってしまったと言えよう。ただし、データの分析の過程でとらえようによってはどのようにも言えると言ったことがあるので、そういった危険性を感じさせる内容を盛り込んだ授業をすることも可能であるし今後の課題としたい。

(3)教育文化コミュニケーション —世界の学校—

鈴木 克彦

1) 授業計画

- ①目 標：P I S Aで世界一となった教育先進国フィンランドやOECD加盟国あるいは発展途上国と学校教と日本の学校教育をさまざまな視点で比較することで、生徒個人がよりよく学ぶための環境作りを社会や学校に要求できる知識を身につける。
- ②内 容：クラスサイズ、生徒の個人的ニーズへの対応、教科の多様性、教員の質・人数、施設・設備教育目標などから文化・宗教・国民性・社会体制・経済状況まで幅広い視点を持ち、文献で調べたり、留学生や研究者から聞いたりして、まとめ、自分が今受けている教育の改善の提言をする。
- ③方 法：a)「フィンランドの教育」(by鈴木克彦)の概要を知り、日本の場合と比較する。
b) 名大留学生招待講演を聞いて、日本

の教育と比較する。c) 文献研究、インターネット検索を通じて、世界の学校教育が学習者の学習をいかに促進しているかどうかを調べる。

- ④計 画：a) フィンランドの学校教育by鈴木克彦
b) 名古屋大学大学院国際開発研究科の留学生を招待し、お国と学校教育について講演を得る。c) 興味のある国について文化と学校教育について各自が調べる。学校教育が中心だがそれだけでなく、文化への興味・関心を広げることも可能。d) 夏休みの課題として世界の文化と教育について、多様な視点で調べる。
e) プレゼンテーション

2) 授業実践

①フィンランドの教育

私が2009年にフィンランドの学校教育を視察した折に執筆した本校紀要の一部を生徒に提示し、理解を深めさせた。

<生徒の感想>

・生徒の自主性を重んじるのがよいと思った。・競争原理ではなく自分が何になりたいかで自ら学習内容を選んでいくのが印象に残った。・日本と比べ選択科目が多い。・学校に部活動がないのは、自分にはづらい。・昼食が無料で提供されて、食堂でゆったり食べられるのがうらやましい。・学校が自由な雰囲気があるが、それで乱れるのではなく一人ひとりが自立成長できるのが特徴的だ。・柔軟な教育制度だ。・授業は大学のようだ。・こどもが中心で、周りの大人が支えるといった感じ。・名大附では体育にやる気がない人が多いが、フィンランドはのびのびと楽しそう。・高校の時点で勉強したいことが決まっているようだ。幅広くかじって興味を発見するという日本式も意味があると思う。・フィンランドでは10年生（1年余分に義務教育を行う）という「留年」が恥ずかしいことではない。このような環境作りを日本もあってよい。・生徒の意欲に点では日本はやらされているように感じるが、フィンランドでは自分から進んで学ぼうとしているようだ。

②インドネシアと中国の学校教育 留学生を招いて

a) インドネシア留学生 ラムさんを招いて

ラムさんは英語でのプレゼンテーションであった。多くの島からなるインドネシアはイスラム教徒が多い多民族国家である。発展途上国で都市部と地方の格差も大きく、ラムさん自身は田舎で育った。交通機関は馬車が多い。一日2ドル以下

の生活をする人々も多い。多民族からなるゆえに、人々が「一丸」となることをモットーとしている。中学で国家試験を受け、成績により高校が振り分けられる。ラムさんは高校はジャカルタで学んだ。学生の町とも言われている。学制は日本と同じ。ボーイスカウト、ガールスカウトが強制的に参加しなければならない。

b) 生徒の議論

・ボーイスカウト、ガールスカウトに参加できておもしろそう。・前住んでいた国なので、さらに深く知ることができてうれしかった。・英語での話に聞き取ることに集中できた。・学生の学習意欲は高いのに、設備が整っていないのはもったいない。・AKBとか日本のものが人気があるのはうれしい。

c) 中国人留学生 ヤンさんを招いて

1980年から「一人っ子」政策があったが、最近変更があった。一人っ子同士の夫婦は2人こどもをもつことができる。1997年に香港、99年にマカオが中国に返還された。漢民族と満民族の違い。チャイナドレスは満族のもの。小学生は赤いスカーフ（国旗の一部）をつける。目のマッサージをしている。中学は夜の学習がある。部活はない。朝は7時半から。高校は寮に入る。8人部屋。高校に入る前には新入生は軍事訓練を受ける制服はジャージ。大学入試は6月7、8日の高考（センター試験）を受けなくてはならない。この日は警察も出て大行事となる。

d) 生徒の議論

フィンランドに比べて日本はいやだなーと思ったが、中国と比べたら（教育が厳しいので）日本でよかったと思った。・日本と比べて教育の差が激しすぎる。言葉が出なかった。・中国の教育システムには驚きました。私のホームステイ先の子も勉強が大変そうで、うらやましがられました。・（中国人の本校生徒）母国に帰国するたびに年下のいとこたちが自分より忙しく勉強に追われているのがいつも気になっていました。今日中学校の時間割を見て、納得したと同時にとてもショックでした。私は日本に居るからこうして遊んだり色々な体験をする時間がある。けどもし両親が中国に帰っていたら、自分も同じような勉強づけの日々を送っていたらと思う。しかたのないことだろうけど幼いときたちがかわいそう。もう少し子供らしく遊んでほしいなと思います。他にチャイナドレスが清族由来だとは初耳でした。

3) まとめ

昨年、私は英語学習のメタ認知知識の拡大、あるいは質を高めることを試みた。それによって彼らの英語学習の質を高めることにある程度の成果を得た。しかし多文化あるいは国際理解の観点から授業を構成できたかと言えば、英語という教科に傾きすぎで、異方向性を同僚より指摘を受けた。本年度はどうか。教育の国際比較を通じて、高校生学習意識改革をねらった点で昨年の「メタ認知知識の拡大・高質化」を引き継ぐものがあるものの、フィンランド、中国、インドネシアを比較考察することで教育は文化、経済、国民感情などを反映するものであることを見事に言い当てた生徒の意見があるように多文化理解教育の目的を達成できたのではないか。

フィンランドは私が一昨年度教育視察したときの資料をまとめたもので、かなり詳細な資料を生徒に渡し、解説した。中国とインドネシアは名古屋大学国際開発科の授業デリバリーを利用して、ヤンさん

とラムさんに来てもらった。生徒に教えるのは初めてで、緊張したようだったが、パソコンなど準備がよくできていた上に、いっしょに来てくれた国際開発の担当者の助言が適切で、生徒にはわかりやすく印象的な授業であった。

5. 2011年度 S L P II と 2012年度 S L P II のアンケート調査の比較

(1) 調査の実施と結果

2012年度高2生前期の質問調査と彼らが2011年度高1年次との比較を行った。高1では理系科目中心の授業だが、高2では文系科目中心の授業中心の構成である。各質問項目の評定尺度についてt検定を行った(データ管理不備から対応のある2標本による検定が行えず、等分散を仮定した2標本による検定を行った)。その結果、平均の差に統計的有意性のあるものは質問7, 23で見られた、また有意傾向を示すものが、質問5, 11, 14, 20, 27であった。以上の結果をまとめたのが、表1、2

表1 有意差が認められたもの

質問項目	年度	平均値	分散	n	df	t	p
7	2012	3.28	.96	114	227	-2.77	.01
	2011	3.66	1.09	115			
23	2012	2.97	1.04	115	228	-2.19	.03
	2011	3.29	1.31	115			

質問7 1つの大きなテーマについて3つのグループの視点から多元的に考えることができたと思う。

質問23 総合人間科より S L P IIの方が、学習目的がはっきりしていると思う。

表2 有意傾向を示すもの

質問項目	年度	平均値	分散	n	df	t	p
5	2012	3.86	.79	114	225	1.63	.10
	2011	3.65	1.01	113			
11	2012	3.62	0.86	114	226	1.83	.07
	2011	3.4	.77	114			
14	2012	3.71	1.02	114	227	-1.70	.09
	2011	3.93	.89	115			
20	2012	2.58	1.41	114	226	-1.68	.09
	2011	2.84	1.37	114			
27	2012	3.06	1.00	114	227	1.88	.06
	2011	2.82	0.94	115			

質問5 S L P IIで学習したような問題に対して自分の意見や、考えを持っている。

質問11 S L P IIで学んだことを現実の生活や社会で応用し役立てられると思う。

質問14 S L P IIの学習では知識を得るのみでなく多様な経験することができるので、関連する事柄への関心が高くなると思う。

質問20 S L P IIで学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。

質問27 自分は擬似科学にだまされないだけの判断力を持っていると思う。

である。

(2)調査結果比較の分析

質問7について文系は多文化理解という軸はあるのだが、合同授業は大学の教員を呼んでの特別授業だけで、本校教員3人の授業は合同で行うのは研究発表会のみで、そこに至るまではそれぞれが独自の観点から授業を小集団で行っている。それに比して昨年度は本校教員3名が「年代測定」という特定課題を理系と文系科目が合同で行う授業があり、生徒の目に見えた形で1つのことを多面的に見るという指導があったため、このような結果になったのであろう。

質問23については、総合人間科は個々の生徒の学習意欲のうえに、自由度も最大限にあり、学習者中心の探求的な学習ができるが、SLPⅡは本校3名の教員サイドでこの科目の目的に合ったことを中心に授業が構成されるため、自らの関心事に直結しないことがフラストレーションにつながるのであろう。2011年度のSLPⅡは理科的科目ということで、学校から教えられる教科としての特性が強く感じられ、割り切った受け入れ態度をもつのではないか。

有意傾向があったものについても若干のコメントを付したい。

疑似科学に対する態度形成(質問27)に寄与が、2012年度SLPⅡにあったとすれば、理科科目中心の構成の授業では、個々の科学の知識や技法の習得に重点が置かれるが、SLP的文系科目として学ぶことで自分が得た知識や技能に対する意識や態度が形成されることからプラスの評価をしたのだろう。得られた理科的知識や技能が社会に対してどのような責任を持つのか、文系科目を学ぶことで、特に判断力が養われるようだ。質問5や11の結果とも合わせて考えると、自分の考えを持つことの重要性を意識し、さらに社会への責任感をより強く感じていると説明がつく。

また質問20に見られように、生徒たちはSLPⅡの授業を他一般教科に比して、その存在の正当性を容認している。自分たちの未来を選択するという自己決定に有益な情報提供をしているものとの認識を持っているといえる。

質問14については、2012年度SLPⅡをネガティブに受けとめているのだろうか。多文化理解の授業でありながら、他国の人々との実際の交流活動が不足しているということなのだろうか。名大国際開発科の留学生との交流を全体で2回、また「世界の学校」では2回他国の人を招いての授業を行ったのだが、不足なのか、それともそれを通して返ってまだまだ学ぶことが多いと感じたのだろうか。「世界の学校」では、3クラスで1クラスだけ同世代の若者17名と交流会を行った。コミュニケーション手段は英語であったが、生徒にも好評であった非

常に有益な会を持つことができた。講義形式ではない、この種の交流会形式の活動を増やすことができれば、実践的な多様な経験ができるのであろう。